



平成19年9月30日 敬老会 職員出し物

台本

「水戸黄門」

【演出】	【脚本】	【監督】
::	::	::
○○	○○	○○
○○	○○	○○
○○	○○	○○

〈BGM〉 「ああ人生に涙あり (カラオケ)」

ここは〇〇県の日本海にほど近い、「〇〇そば」で有名な〇〇という町。
江戸を目指す水戸光圀の御一行は〇〇町を抜け、□□に向かっていた。

〈BGM〉 「八兵衛のテーマ」

(八兵衛) 「ちよつと、ちよつと。御隠居。〇〇に寄って行かないんですか。ここは〇〇って言って、うどんで有名なんですよ。ねえ、助さんと格さんからも言っておいて下さいよ。」

(格さん) 「しかし、はち。飯はさつき食べたところじゃないか。」

(助さん) 「そうだぞ。□□まではまだ遠いぞ。」

(水戸光圀) 「私は先を急いでいます。それにうどんは好きではありません。」

(お銀) 「ちよつと、はっちゃん。〇〇が有名なのは蕎麦そばでしょ。まったく。」

(八兵衛) 「おっと、こいつは、うっかりだ。」

(御一行) 「(ハハハハッ。)」

(水戸光圀) 「蕎麦ですか。私は蕎麦が大好きなんです。いいでしょう。〇〇の蕎麦を頂いていきましょうか。」

(八兵衛) 「やったー。」

(助さん) 「まったく、はちの奴は、喰いもの事ばかりだな。」

(格さん) 「まったくだ。」

(八兵衛) 「そりゃ無いよ。助さん、格さん。ささつ。入りましょ、入りましょ。」

〔BGM〕「道中物見遊山」

〈お店に入る〉

(八兵衛)「へへっ。じやまするよ。」

(店 主)「なんだと。じやまするなら帰つとくれ。こっちは忙しいんだ。」

(八兵衛)「挨拶代わりの冗談だよ。6人前おくれ。」

(店 主)「これはこれは、お客様でしたか。失礼しました。」

(助さん)「おい、はち。5人前だろ。5人しかないだろ。」

(八兵衛)「大丈夫、大丈夫。おいらが2人前食べるんだから。」

(お 銀)「まったく、はっちゃんたら。」

(格さん)「ほんと、ちゃっかりしてるなあ。だけど、はち。〇〇は皿そばだぞ。追加すりやいいんだよ。」

(八兵衛)「たはあ。こりやまた うっかりだ。」

〔BGM〕「春うらら」

〈村屋の娘と弘さんが、そば粉の配達に来る〉

(お 夏)「まいどー。そば粉持って来ました。」

(弘さん)「(持っているそば粉を)ご主人、どこに置いときましたよ。」

(店 主)「ああ、そうだな、その辺に置いといてくれ。」しゅうげん「それより、おなっちゃん。祝言の日取りは決まったのかい。」

(お 夏)「(照れながら)いやだあ。おじさんたら。まだ早いですよ。それにおとつあんの具合が良くならないと、祝言しゅうげんも挙げられないし。ねえ、弘さん。」

(弘さん) 「へえ。」〈ちよつと照れる〉

(店 主) 「はははっ。おなっちゃんと違って、うちのおつかあと来たら。寝転んで、せんべいかじって、腹をポリポリかいてばっかりだよ。」

(水戸光圀) 「ほほお。お二人はご結婚されるのですかな。」

(お 夏) 「ええ、時期をみて。今はおとつあんの具合が良くないものですから。私もつい最近、お店の手伝いを始めたばかりで、お客さんにご迷惑かけないように、頑張ってるんです。」

(店 主) 「いやいや、迷惑だなんて。おなっちゃんはね、〇〇ごちの粉問屋こなどんや「尚屋ひさしや」のお嬢さんなんです。でも近頃は、あくどい商売をする問屋が現れてね。うちにも顔を出し始めてるんだが、うちはおなっちゃんところからしか買わないよ。」

(お 夏) 「ありがとう。おじさん。」

〈BGM〉「アクセント」

〈そこへ、むらや村屋が入ってくる。お夏と弘は天井や壁を向く〉

(村 屋) 「おう、じやまするぜ。旦那。」

(店 主) 「なんだと、邪魔するんなら、帰ってくれ。ああ、村屋さんか。何回来たって同じことだ。」

(村 屋) 「なんだい、なんだい。つれねえなあ。この前の話、考えてくれてないのかい。」

(店 主) 「だから、その話はこの前も断ったはずだ。うちは昔からずっと粉問屋は決めてるんだ。」

(村 屋) 「あその親父はもうすぐ、くたばっちゃうよ。悪いことは言わねえ。安くしとくから。」

〈お夏が怒り調子で突っかかる〉

(お 夏) 「ちよつと、ちよつと。どこの親父がくたばるって？ あたしのおとつあんはね、病弱だけど、とつてもいい人なんだ。それに私やこの弘さんもいるし、お店の方は何の問題も無いんだよ。」

(村 屋) 「なんだ。いたのかい。まあいいや。人がいいだけで、病気が治ったりしねえよ。お前んところは薬を買う金もねえだろ。〇〇のそば大会もうちがそば粉を卸すことに、おおかた決まってるんだ。」

(お 夏) 「嘘つくんじゃないよ。そば大会はいつもうちのそば粉を使ってもらってるんだ。そんな話は聞いちゃいないよ。」

(村 屋) 「お代官さまから直接お話が来てるんだ。なんだったら、お夏、おまえが直接お代官様に聞いてみるんだな。」
(弘さん) 「黙って聞いてりや、言いたい放題言いやがって。(掴みかかろうとする。)」

〈用心棒がスツと間に入り、弘はたじろぐ。〉

(村 屋) 「(弘を見ながら) なんでえ。この汚ねえ野郎は。」

(お 夏) 「なんだと、村屋。お前の方が汚ねえんだよ。キャー、弘さん、お夏 怖い。(と弘の後ろに隠れる)」

(水戸光圀) 「格さん。止めなさい。」

(格さん) 「へい。御隠居」。「おい、お前さんがた。ここは店中だ。さつきから聞いてりや、なんだ。せつかくの皿そばも味が落ちちまうぜ。」

(村 屋) 「へっ。味が悪いのは粉のせいだよ。親父がくたばり損ないだと、そば粉までくたばってらあ。」

(お 夏) 「なんだと、テメエ。もういっぺん言ってみろ。」

(村 屋) 「相変わらず、威勢だけは一人前だなあ。まあ、今日のところはいいさ。また来るぜ、旦那。」「どきやがれ。」

〈村屋たち 店を立ち去る。用心棒はぎ一行を舐めるように見てから去る。〉

〈BGM〉「男のやさしさ」

(水戸光圀) 「なんですか、今の下品な連中は。」

(店 主) 「へえ、最近幅を利かせている、新しいそば粉の間屋です。おなっちゃんの親父さんが倒れてからというもの、〇〇町内のそば屋に顔を出しまくってやがるんです。お代官様に媚びへつらってやがって。いや、すいません。旅のお方にこんな話を……。」

(水戸光圀) 「ふむ。」へしばし一考「お夏さんとやら。せっかくだ。そば粉をひくところを見せてはおくれませんか。」
(お 夏) 「ええ。ぜひご覧になってください。先ほどのお礼もしたいですし。」

(八兵衛) 「へへ。帰りには何かお土産がもらえるかも知れませんね。そば饅頭とか。」

(助さん) 「こら、はち！お前は本当に節操が無いな。」

〈BGM〉「ひとりぼっち」

〈場面変わって、尚屋へ〉

(尚屋の主) 「おお。お夏。帰ったか。弘もご苦労さんだったな。」

(弘さん) 「親父さん、お体に触ります。」

(尚屋の主) 「いやいや、大丈夫だ。わしがこんな体になっちゃったばかりに、お前達にはすっかり大変な思いをさせちまうて。それより、そば粉の方はどうだい。ちよつと小耳に挟んだんだが、例の村屋がいろいろと幅を利かせてるって言うじゃないか。」

(お 夏) 「そんな話、どこから聞いたんだい。おとつあん。」

(尚屋の主) 「いやいや、気にするな。おとつつあんが店の事を知らないでどうする。それに町のそば屋さんとは古くからの付き合いだ。そう簡単にお客は離れたりしないよ。私達が生活出来るだけの儲けがあれば充分なんだ。」

(お 夏) 「そうだね。おとつつあん。そうそう、さつき、そば一さんにそば粉を卸したんだけど、そこに例の村屋が現れて、弘さんも危ない目にあっただけど、旅のお方に助けられたんです。その御隠居さんがそば粉をひくのを見たいっておっしゃって、お礼方々お連れしたんですよ。」

(尚屋の主) 「なんだ、それを早く言わないか。お待たせするんじゃない。早くお通ししなさい。」

(お 夏) 「ご隠居さま、どうぞ、こちらへ。」

(尚屋の主) 「これは、これは、ようこそいらっしゃいました。ご覧の通り、床とこにふ臥せておりました。先ほどはお夏と弘がお世話になったようで。なんとお礼を申し上げてよいやら。」

(水戸光圀) 「ああ、そのまま結構です。私は、越後のちりめん問屋の隠居で光右衛門みつえもんと申します。こちらは共の者で、助さんに、格さん。お銀と申します。」

〈それぞれ、会釈する〉

(八兵衛) 「御隠居、おいらは。」

(水戸光圀) 「ああ、すまんすまん、忘れておった。こいつは喰い意地の張った、八兵衛です。」

〈八兵衛、会釈しながら、ずっこける〉

(尚屋の主) 「それはそれは、遠いところから、さぞお疲れでしょう。しかし、そば粉は朝早くひいたほうがいいんです。どうでしょう。よかったら、今夜はうちに泊まって、明日の朝、そば粉をひくのをご覧になっては。」

(八兵衛) 「やったあ。御隠居。そうしましょ、そうしましょ。これで晩飯にもありつけた。」

(格さん) 「こら、はち。またお前は！」

(水戸光圀) 「そうですね。それではお言葉に甘えましょうかな。」

〈BGM〉 「なし」

〈その夜、格さんはすでに、光圀の指示により、探りを入れるため、宿を出ていた〉

(お 夏) 「おじやまします。皆さん、旅の疲れは取れましたでしょうか。」

(水戸光圀) 「ええ、ええ。すっかりと取れました。ありがとうございます。」

〈BGM〉 「疑惑」

(八兵衛) 「あれっ、そういや、格さんがいないなあ。」

(助さん) 「御隠居。昼のそば屋での話なんです。あの村屋、お代官となにやら怪しいですね。」

(水戸光圀) 「助さんもそう思いますか。」「すでに格さんには走らせています。」

(格さん) 「御隠居。只今帰りました。ご隠居の言ってた通り、村屋とお代官は、繋がっていました。他にもなにやら匂います。」

(水戸光圀) 「ふむ。叩けば他にも埃が出そうですね。」「お銀。悪いが、あやつらに近づいてきてくれないか。」

(お 銀) 「承知しました。では早速。」

〈BGM〉 「なし」

(水戸光圀) 「お夏さん、どうやらこの〇〇の町には、良からぬ輩がおりそうですね。よかったら、訳を話してくださいかな？何か、力になれるかも知れません。」

(お 夏) 「はい。でも、一体ご隠居さんは、どこのどなたで…。」

(水戸光圀) 「いやいや、只のおせつかい好きの旅の隠居です。」

(八兵衛) 「そうそう。少々、おせつかいが過ぎますがね。」

(水戸光圀) 「これ、はち！」へしまった、という顔つきをする

〔BGM〕 「隠密行動」

〈場面変わって料亭〉

〈お銀は障子越しに話を盗み聞く〉

(村屋) 「お代官さま。例のそば大会の件ですが、そろそろ良い返事をお聞かせ下さい。死にかけ親父の尚屋ですが、目の上のたんこぶで。早いところ、あれをお代官様の力でなんとか…。これはほんのご挨拶です。」

(悪代官) 「村屋。お前もつくづく悪よのう。」

(村屋) 「いえ、いえ。お代官様ほどでは…。」

(村屋・代官) 「クツクツクツ。」「ハツハツハツ。」「ウツヒヤツヒヤツヒヤツ。」

(悪代官) 「分かっておる。」〈胸元から証文を取り出す〉「これが、その旨をしるした証文だ。」

(村屋) 「おおつ。ありがとうございます。」

(悪代官) 「これを見せれば、どのそば屋もお前の所からそば粉を買わざるを得んぞ。しかしなあ、お金だけではつまらんなあ。」

(村屋) 「では他に何か？」

(悪代官) 「いやな、その死にかけ親父の粉問屋「尚屋」の娘。お夏とか言ったな。わしの好みでな。あの気の強そうな所なんか特にわし好みじゃ。」

(村 屋) 「お代官様の悪い癖が出ましたか。分かりました。お夏をお連れするように致します。その際には、例のそば粉の件、お願いしますよ。」

(悪代官) 「分かっておる。任せておれ。」 〈気配を感じて〉 「しっ。」 「これ、なにやつ。」

〈BGM〉 「なし」

〈障子が開き、お銀が現われる〉

(お 銀) 「お待ちせしました。銀やつこと申します。」

(村 屋) 「これ、芸者など呼んどらんぞ。」

(お 銀) 「あら、お部屋を間違えましたか。失礼致しました。」

(悪代官) 「いやいや、いいではないか。なかなかの器量だ。これ、銀やつことやら、こちらで酌をいたせ。」

〈BGM〉 「待ち伏せ悪巧み」

〈場面変わって、朝早く。お夏と弘が粉ひきの準備をしている。弘は粉袋を運んでいる。〉

(弘さん) 「お夏さん、ご隠居たち、喜んでもらえますかね。」

(お 夏) 「そうだね。弘さん。」

〈用心棒と手下が現れる〉

(手下 1) 「おう、おはようさん。」

(お 夏) 「なんだい。朝っぱらから、汚い顔並べて。見たかないよ。あっち行きな。」

(手下 2) 「相変わらず気が強えなあ、お夏。悪いがな、ちよつと来てもらおうぜ。」

(手下 3) 「どこだって、いいやな。大人しく来やがれ。」

(弘さん) 「この野郎。俺が相手だあ。」 (弘が突っかかるが、手下にボコボコにされる) 「うわあー。」

(お夏、手下3人の股間を次々と蹴り上げる。) (合わせて鐘を打つ。)

(お夏) 「この野郎。女だと思つて、舐めてんじやないよ。」

(しかし、用心棒に腕を取られ、手下に渡される。)

(お夏) 「ああ、くそつたれ。か弱い乙女に何てことするんだい。」

〔BGM〕 「弥七のテーマ」

(弥七さっそうと現れる)

(弥七) 「こら、てめえ達。何してやがる。」

(用心棒) 「なんだ、お前は。ひっこんでな。怪我するぜ。」

(弥七) 「そうはいかねえな。その娘をこっちに渡すんなら、勘弁してやってもいいぜ。」

(用心棒) 「おい、おめえら。先に行つてな。」

(手下たち) 「へい。」「行くぞ。」 (お夏を連れて行く)

(弥七) 「待ちやがれ。」 (逃げる手下を追いかけようとする)

(用心棒) 「おーっと。そうは行かねえな。」 (弥七の行く手に立ちふさがる)

(弥七) 「野郎っ。」

(少しだけ格闘して、弥七が風車を投げる (フリをする。))

(用心棒) 「ぐあっ (風車を自分の腕に突き刺す)。こざかしい。今日の所は勘弁してやる。」 (立ち去る)

(弥七) (追うのを諦め、弘に駆け寄る) 「一体どうなさったんでえ。」

(弘さん) (意識もうろうと) 「どなたか存じませんが、わたしを尚屋まで…。」「うっ。」〈弘は氣を失う。〉

〔BGM〕「突然訪れる悲しみ」

〈朝、ご隠居が粉をひく所を見るため、粉ひき場へ集まると、怪我をした弘さんの足を引きずって弥七が現れる〉

(弥 七) 「尚屋さんはこちらで。」

(尚屋の主) 「おおっ。弘っ。どうしたんだ。弘っ。」

(弥 七) 「おおっ、ご隠居。それにみんな。ちよつと待っておくんな。」〈弘を長座位にして、氣合を入れる〉

(弘さん) 「うっ! (氣が付く)」「親父さん、大変です。お夏さんが。お夏さんが。痛ててっ。」

(八兵衛) 「っていうか、親分。引きずって来なくても、先に起こしてから来れば…。」

(格さん) 「(八兵衛を押ししけ) 弘さん。大怪我してるじゃないか。それに弥七。一体何があつたんだ。」

(弘さん) 「お夏さんが、さらわれたんです。この方が助けに入ってくれたんですが…。」

(尚屋の主) 「何だと。お夏、お夏が…。」

(弥 七) 「ご隠居。面目めんぼくありません。あつしがいながら、取り逃がしちました。」

(助さん) 「ご隠居。こいつは…。」

(水戸光圀) 「うむ。」「おそらく…。」

〈そこへお銀が現れる〉

(お 銀) 「ご隠居。」「村屋の仕業ですよ。昨日、代官屋敷で探りを入れていた時に聞きました。あの悪代官、そば粉の

卸を牛耳る証文と引き換えに、お金だけでは飽きたらず、お夏さんまで手箆てこめにしようと。今頃は代官屋敷に。」

(水戸光圀) 「むむつ。けしからん。断じてけしからん。」 「助さん、格さん。」

(助・格) 「はっ。」

〔BGM〕 「待ち伏せ悪巧み」

〈場面変わって、代官屋敷〉

〈村屋がお夏と手下を連れてやってくる〉

(悪代官) 「おお。お夏よ。よく来た、よく来た。さあ苦しゅうない、近う寄れ。」

(お夏) 「なに言ってるんだい。この悪代官。お前と一緒にになる位なら、死んだ方がマシだ。あたしにはれっきとした許婚いいなずけがいるんだよ。」

(悪代官) 「ブハハハ。わしは、そちのその気の強い所が大好きだ。心配せんでも、ここは代官屋敷。誰も助けは来んぞ。ささ、こつちに来い。」 〈代官はお夏を追いかけ回す〉

(お夏) 「弘さん。助けてえ。」

〔BGM〕 「天下の副將軍・光圀のテーマ」

〈黄門一行現れる〉

(水戸光圀) 「お邪魔しますぞ。」

(悪代官) 「なんだ、このジジイは。邪魔するなら帰ってくれ。」

(村屋) 「ああもう。邪魔だ、邪魔だ。あっち行け。今は取り込み中だ。ここは代官屋敷だぞ。そんな事も分かんのか。このジジイ。」

(助さん) 「なんだと。ご隠居に向かつて。」

(水戸光圀) 「まあまあ助さん。」(なだめる)

(村屋) 「どこの隠居ジジイか知らんが、痛い目に遭わねえうちに、さっさと消えやがれ。」

(水戸光圀) 「それが消えるわけには行きませんな。」

(悪代官) 「なんだと、このくそジジイ。」

(水戸光圀) 「いえいえ、私は越後のちりめん問屋の隠居、みつえもん光衛門と申す。ここに臭くて悪どい輩たちがいると聞きましてな。すこし、お灸を据えてやろうと思ひ、参上致しました。」

(格さん) 「(代官を匂い) 御隠居。ここから酷く臭います。こいつが一番臭いです。どうやら、この一件の黒幕に違いありません。」

(悪代官) 「何を。無礼な。わしはここら一体を取り仕切る代官、△△だ。ここをその代官屋敷と知つての狼藉ろうぜきか。ええーい、我慢ならん。村屋！ 構わぬ。こやつらを斬り捨ててしまえい。」

(村屋) 「(用心棒に) 先生、お願いします。」

(用心棒) 「うむ。」「お前たちに恨みは無いが、ここで死んでもらう。」

(八兵衛) 「へっ。お前なんかにやられてたまるか。やーい、やーい。」

(用心棒) 「なんだと、この狸野郎。」

(八兵衛) 「ひえー。助さん、格さん。やっちゃって下さいよ。」(助・格の後ろに隠れる)

(助さん) 「はち。自分の身は自分で守るんだな。」

(八兵衛) 「そりゃ無いよお。」

(水戸光圀) 「助さん、格さん。思う存分、こらしめてやりなさい。」

(助・格)「ははっ。」

〔BGM〕「助格大立ち回り」格闘シーン〈手下も現れる〉

◎助さんと用心棒は一旦、舞台から下がる。

★代官VSお夏 ↑お銀と八兵衛が助けに入る

(お 銀)「このスケベ代官。えーい。」

(八兵衛)「お夏さん、こっちへ(引き寄せて逃げる)。」

★お夏・八兵衛VS手下① ↓八兵衛は軽くないなされ、代わりにお夏が近くにあった缶で手下をやっつける

(手下1)「この野郎。お夏を渡しやがれ。」

(八兵衛)「手下にやられそうになる)ぎゃー。」

(お 夏)「何するんだい。この野郎。ええい、よくも弘さんを。弘さんの仇い(ガン)。さあ、八兵衛さん、こっちよ。」

(八兵衛)「(お夏に助けられる。)すまねえ。お夏さん。」

★格さん・弥七VS手下②・③ ↓弱った手下を水戸光圀が杖で殴る

〈格さんと弥七は背中合わせで敵と向かい合う。〉

〈格さんVS手下②・弥七VS手下③で格闘 ↓順に光圀の方へ切り飛ばす。〉

(水戸光圀)「(手下②・③を杖で倒してから)この老いぼれ、まだまだ戦えますぞ。」

★助さんVS用心棒

◎助さんと用心棒が舞台に出てくる。

(助さん) 「なかなか腕が立ちそうだな。何も悪者に付かなくても良かろうに。」

(用心棒) 「ふん。こっちの方が金になるんでな。長いものに巻かれろって言うじゃねえか。」

(助さん) 「それも今日までだ。」

(用心棒) 「ふっ。どうかな。」

★助さん・格さん VS 悪代官

(助さん) 「この女つたらしが。許せねえ。」

(格さん) 「人のこと言えねえだろ。助さん。」

(悪代官) 「何を、この若造が。」

〈格闘シーン終わり〉

(水戸光圀) 「助さん、格さん。もういいでしょう。」

(助・格) 「ははっ。」「ええーい、静まれ、静まれえ。」

(格さん) 「静まれえい!!この紋所が目に入らぬか。」

〈BGM〉「印籠」

(格さん) 「こちらにおわす方をどなたと心得る。恐れ多くも先の副將軍、水戸光圀公であらせられるぞ。」

(助さん) 「一同。ご老公の御前ごぜんである。頭が高い。控えおろう。」

(皆のもの) 「ははあ。(土下座)」

(水戸光圀) 「代官、△△よ。金に留まらず、娘を手籠めにしようとは、許せん。断じて許せん。」「そして、村屋。おぬし、

自分の私腹を肥やす為に、娘をさらって代官に差し出すとは、商人の風上にも置けん。ましてや、同じ粉屋

を営む卸問屋の娘をさらうとは、言語道断!! 兩人とも、おつて〇〇城城主より厳しい沙汰が下りるであろう。覚悟しておれ。代官。村屋。この一件につき、なにか申し開きがあるか!!」

〈代官、開き直る〉

(悪代官)「いやいや、一体何のことをおっしゃっておられるのか、私めには、まったく身に覚えがございません。」

〈尚屋の主と弘さん登場〉

(お 夏)「ああつ。おとつつあん、大丈夫かい。こんな所に出てきて。実はね、ご隠居さんは水戸のご老公さまだったんだよ。」

(尚屋の主)「そうだったのか。そうとは知らず、とんだご無礼を。実はここに証拠をお持ちしました。」

(村 屋)「ああ、なぜその証文をお前達が……。(自分の着物を改め、証文の代わりに風車を取り出す。)」「なんだこの風車は!」

(用心棒)「ああつ。その風車は!! あいつですぞ。」

(弥 七)「へへつ。(鼻を指でこする)」

(悪代官)「けつ。証文? 一体なんの事か……。」

(お 銀)「その証文は昨夜、この悪代官から村屋に渡されたものですよ。」

(悪代官)「この女。いい加減なことを……。」

(お 銀)「あらつ。私の顔をお忘れで?」

(悪代官)「何を?」〈目を凝らす〉「ああつ。お前は、銀やつこ。いやいや、知らぬ知らぬ。断じて知らぬわ。」

(水戸光圀)「ほほお。あくまでもシラを切るつもりですかな。」

(悪代官)「何を、このくそジジイ。シラを切るも何も。それによく考えれば、水戸のご老公がこんな所にいる筈はない。」

〈悪代官はスツと身を起し〉

(悪代官)「ご老公の名を語る不届き者めが。(単身で斬りつけに行く)」

〈助さん・格さんにやられる〉

(悪代官)「ぐあー。」

〈しかし、なかなか倒れない。3回ほど繰り返し、やっと倒れる。〉

〈BGM〉「再会幾多の日々」

(水戸光圀)「まったく往生際の悪い奴じゃ。くたばり損ないとはお前さんの事じゃ。」「さて、お夏さん。これで〇〇の町も安泰じゃろう。今までの様に美味しいそば粉をお店に届けてやって下さい。」「

(お夏)「御隠居様、ありがとうございます。」「

(助さん)「それに弘さんとの祝言もある事だしな。」「

(お夏)「いえ、でもおとつつあんが。」「

(尚屋の主)「お夏よ。わしはもう大丈夫だ。むしろ早くお前の花嫁姿を見たいんだ。」「

(弘さん)「ではおとうさん、結婚を許して頂けるんですか。」「

(尚屋の主)「許すも何も、わしは始めから反対もしとらん。」「弘よ。お夏はお転婆だが、女だ。弘と一緒にいてくれたら、わしも安心だ。お夏をよろしく頼む。」「

〈お夏ら3人寄り添う〉

〈BGM〉「明日へ」〜「旅立ちのテーマ」

(格さん) 「では御隠居。□□へ急ぎましようか。」

(水戸光圀) 「そうですね。参りましょう。」

(お夏) 「ご隠居様、皆さん。どうもお世話になりました。」

(水戸光圀) 「いえいえ、おせっかい好きのジジイが勝手にしたことです。それよりも、お夏さん、弘さん。おとつつあんを大事にしてあげるんだよ。」

(お夏・弘) 「はい。」

(八兵衛) 「さあさあ、御隠居。先を急ぎましよう。□□はカニが捕れることで有名なんですよ。」

(お銀) 「また、はっちゃんたら。食べる事ばかりね。」

(助さん) 「それに、はち。この時期はカニは捕れないぞ。まあでも温泉街だ。きっと芸者は多いだろうよ。デヘヘ。」

(八兵衛) 「ええー。そりゃ無いよ。」

(格さん) 「助さんの悪い癖が出始めたな。」

(助さん) 「格さん、そりゃ無いだろうよ。」

(一 同) 「はははっ(笑)。」

〈BGM〉「完」



